
最高のクリスマスプレゼント

たくみ226

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最高のクリスマスプレゼント

【Nコード】

N2848B

【作者名】

たくみ226

【あらすじ】

この話は、クリスマスで、コナンがクリスマスプレゼントで得たものによって、コナンがさまざまなことを実行していき、それによって、さまざまな関係が出てくる明るい話題中心のお話です。『最高のクリスマスプレゼント』によって起こるコナンの運命はどうなるのか！？

ブローグ

12月24日・・・そう、この日はクリスマスの日だ。日本では一般的に、この日の夜にサンタクロースが現れて、煙突から降りて、大きな靴下の中にプレゼントを配りにやってくるといわれている。しかし、サンタクロース&クリスマスプレゼントについては、スコットランドやフィンランドといった寒い地方から生まれたものでなく、今のトルコ周辺で生まれたキリスト教の主教である聖ニコラスという人間の潤沢な財産を子供たちのために使ったことによってできたものだといわれている。

クリスマスはキリスト教の宗教的行事であるために、世界では、クリスマス을祝う国と祝わない国とがあるが、この日本では、キリスト教は、欧米各国と比べて信者が少ないものの、クリスマス関連商品を売って儲けようとしている大企業から中小企業、そして、クリスマスを楽しむ友人同士、彼氏彼女、夫婦、家族・・・彼らは楽しくクリスマスを祝っている。そう、この話の舞台である米花市米花町も、このクリスマス进行を思いっきり楽しむほうに入っていた・・・

12月24日

この日は平日で、もうこんな時期だというのに学校の授業は通常通りあった。

この帝丹小学校1年B組の生徒である江戸川コナンは、この日に発売される推理小説を学校から近い馴染みの本屋で予約して購入し、ゆつくりと家に帰宅しようとしていた江戸川コナン。彼は、本屋の向かいに会ったネットカフェで個室を予約して本を読むことにした。というのも、コナンの家、すなわち、毛利探偵事務所では、毛利小五郎探偵が依頼者を迎えており、コナンはどこかに遊びに行けと小五郎に言われてきたからだ。

一方蘭は、補習と部活があるために7時ごろに帰ってくるという。そのため、たまにはこういう所にいるのもいいやと思っていた。

そして、そのネットカフェに入ろうとしたそのとき……

コナン「あれっ、あれって……」

コナンが反対側の歩道を見て言った。そこには……

『あっ、いたいた！コナンくん！！』

『やっぱり本屋の近くにいましたか？』

『えっ？どれどれ……本当だ、コナンがいるぞ。おーい、コナンー！！』

コナンはその声で振り返った。この師走で雪が降っているクリスマスの日で、そこらじゅうにクリスマスソングが流れている時に、よ

くコナンに聞こえてきたものだと思う。

コナン「あれは・・・元太に光彦、それに歩美ちゃん、灰原もいるな？」

そして、コナンは反対側の歩道に向かって叫んで言った。

コナン「おい、今行くからなっ！」

こうして、本屋の目の前にあつた横断歩道から、歩行者用の信号が青になってから渡り始めた。

プロローグ（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

クリスマスが間近に迫っているので、クリスマスにぴったりだと思うような話を作ってみました。（と言っても、主軸の小説の内容が行き詰っているとというのが本音なんですが・・・）

この話の冒頭にあったサンタクロースの話は、僕が、今学校の英語一で習っている内容で、偶然だったのでこの中に入れてみました。このプロローグだけでは勘がいい人以外の方は『最高のクリスマスプレゼント』とは何ぞや？と言う方が多いかもしれませんが、最悪クリスマスまでには分かります。と言うのは、僕の小説の書く方法は、大まかな話の構図は先に完成させるのですが、話については、ストックは大まかにした後、小説の反響で内容を決めることで、すぐに出せるものはあまり作らないほうで、この話については、次回の話は半分出来上がっていますが、皆さんの感想を見たりして手直しするので、日曜日にはできると思います。皆さんに最後まで楽しく見てもらおうと思うので、評価、感想、批判などどんどんください。

第1話

そして、彼らの方に向かって尋ねて言った。

コナン「お前ら、どうしてここにいるんだ？」

すると、光彦が誇らしげに語った。

光彦「決まってるじゃないですか、コナン君を探してたんですよ。

今日は新しい推理小説か何かの発売日だという事は調べていたんで分ってましたから。」

コナンは、少しあきれながら話した。

コナン「やっぱり・・・で、こんなときにみんなで居るという事は、誰かん家でクリスマスパーティーをするかって言うことを話し合いたいとか？」

すると、光彦は、いつもながらコナンの推理力に驚いていた。

光彦「そ、そうです。そのことを今、コナン君を言おうと思ってたんです。」

すると、歩美が光彦が喋ろうとしたところに割って入ってきた。

歩美「それでコナン君、私たち4人で話し合った結果、今日の夜にみんなで博士の家でクリスマスパーティーをすることにしたから、それをコナンに言おうと思って・・・」

コナンは心の中で『やっぱりな。』と思いながら言った。

コナン「わぁーった。で、何するの？」

歩美「ケーキは博士に頼んでもらってるし・・・ツリーはこの前みんなで飾ったから・・・あっそうそう、プレゼント交換はどう？」

すると、光彦が喜んだように言った。

光彦「いいですねえ！歩美ちゃん。それで決まりですー!!」

一方、元太は、先ほどの歩美の『ケーキ』発言によって、今までの世界とは離れた、元太専用である食べ物妄想ワールドにすっかり引き込まれていった。

元太「ああ、ケーキか・・・一体何センチあるんだろうなあ？もしかして、50センチ？それだけあったらもう最高だよなあ。シャンパン飲みながら食べるのってもう最高！！家にあるシャンパンでも持っていこう。」

ここで、元太が一向にしゃべらないことを不思議に思った光彦は後ろにいた元太を見た。そして、通常では考えられないであろう量のヨダレを垂らしている元太を見て言った。

光彦「げんたくくん。さっきの歩美ちゃんの『ケーキ』発言で、またヨダレ垂らして妄想してましたねっ？」

ここで、光彦に自らの妄想ワールドを破壊された元太は、少しふてくされながら光彦に向かって言った。

元太「ッたくよ、光彦、お前なんでオレがせっかくケーキを食べようとしていたのによっ・・・せっかくのムードを何してくれるんだ！」

光彦は、元太のためを思って元太を妄想ワールドから引き摺り下ろそうとしていたのだが、ここまで元太に言われたので、少し怒りながら言った。光彦のことだから、長い付き合いでこの時に元太ワールドに首を突っ込むと元太が興る事くらい分かっていたように思えるかもしれない。しかし、それでも光彦が元太に注意した理由・・・それは、元太は気づいていなかったが、ヨダレを着ている服に垂らして格好悪い様子になっており、さらに言うと、元太がケーキだと思っていたのは元太の前にあつた電柱で、元太はもうすぐ、その電柱を食べようとしていたのだから・・・。

光彦「元太君、自分がしていること分かってますか？」

元太は少し怒った様子で光彦に言った。

元太「なんだよ・・・えっ!？」

光彦は、自分の状況が分かっている元太に、妄想の世界に入っている間の自分が何をしていたかを、元太の後ろでファッション雑誌

光彦「よく見てください元太君。」

これに続いて歩美も元太に言った。

元太は、彼らが行ってからヨダレがついている（というより、完全

にヨダレで濡れていると言ったほうが適切かもしれないが・・・）

元太「エエエエエエエエー………ツ!!!!」

そして、コナンは「元太の奴、全く気づいてなかったんだな」と言

8

第2話

阿笠邸

『ピンポン……』

歩美が阿笠博士の家のインターホンを鳴らした。その瞬間、室内から『はあゝい』と言う老人の声が聞こえた。しかし、ドアを開けて出迎えたのは……

『あれっ？……あら、コナン君やん。それに、歩美ちゃん、光彦君、元太君それに……哀ちゃん。』

この瞬間、歩美、光彦を始めとした子供たちは『わっつ、和葉お姉さん。』と言い、コナンに関しては『エエー……』と言ってひどく驚いていた。なぜなら、ここに和葉がいると言うことは、彼女は大阪から来たであろう和葉がいると言うことは、もう一人、コナンの同業者である探偵であり、良きライバルであり、コナンのよき親友？である、服部平次がいると思ったからだ。

和葉「コナン君、何で私にそこまで驚いてるん？……あっそうかコナン君、私がここに居るという事は平次もここにおるとか思ったやろ？」

コナンはこれに対して当然いるとおもっていたが、この和葉の発言ですこし不審な表情をして言った。

コナン「えっ？と言うことは、平次兄ちゃんはここに居ないの？」

すると、和葉が少し残念そうにして言った。

和葉「ごめんなあゝコナン君。平次の奴、なんか用事があるみたいとか何とか言つて、今名古屋におるんや。7時ごろにはこつちに着くみたいやけど・・・それまで平次待つてくれへん？ごねんなあ、コナン君・・・」

コナンは和葉に元気そうな表情と声色で言った。

コナン「うん、分かった。」

このときコナンは、邪魔な奴がいなくて少し嬉しそうな、そして、こんなときにすぐ目の前にいそうな奴がいなくて、少し悲しそうな・・・そんな表情をしていた。

阿笠邸内

阿笠博士の家に入った子供たちは、クリスマスの飾り付けなどをしていて。阿笠博士は、杯戸町にある”超”有名なケーキ屋さんで注文していたケーキを取りにいっている。阿笠邸内の飾り付けを作るのは少年探偵団、それを飾るのは、この中で一番背が高い和葉だった。

歩美「元太君どう？・・・ってあっ！？何してるのよ」

歩美の悲鳴めいた声がした。そう、元太が製作している飾りが、ケーキとかばかりで、まともな物を作っていなかったからだ。それに

元太は反論した。

元太「何だよ歩美。別にクリスマスケーキとか、フライトチキンとかの飾りで……。クリスマスの飾りなんだからいいじゃねえかよ！？」

歩美は、元太のその考え方に疑問を抱いて、反論した。

歩美「元太君、ほんとに食べ物ばかりしか感心がないんだから…普通、クリスマスといえば、トナカイとか、サンタさんとか…。何かそういうのじゃないの？」

そのとき、コナンの携帯電話が鳴った。しかし、その携帯電話は、“コナン用”ではなく、“新一用”だった。そして、サブディスプレイに、『毛利蘭』とあった。そしてコナンは、自分のポケットに、蝶ネクタイ型変声機があることを確認し、急いで外に出た。

コナン（新一の声）「もしもし、蘭。」

すると、蘭が電話越しに詰め寄った感じで言った。

蘭「新一…。今日クリスマスよ。新一、こっちに帰ってくるの？」すると、新一は、申し訳なさそうに言った。

コナン（新一）「…。悪い。蘭…。今日はちよつとな。」

蘭「そんなぁ…。」

コナン（新一）「あつ、今ちよつと忙しいから切るな。じゃあな、蘭…。」

『ツ―・ツ―・ツ―…。』

コナンは心の中で蘭に新一として会いたいけれど会えない悲しさを持っていた…。

コナン「（悪いな、蘭・・・俺、この姿で蘭に会えない・・・でも、来年こそ、来年こそは黒の組織をぶっ潰して・・・）」

第3話 コナンのプレゼントの正体

午後7時 阿笠邸

阿笠邸でのクリスマス会がスタートした。

この時間にいるのは、この家の持ち主である阿笠博士は当然として、コナン・哀・元太・光彦・歩美たち少年探偵団、そして、阿笠邸になぜかいた和葉（和葉に少し失礼かもしれませんが・・・）と、その後に遅れてきた平次、そして、高校から直接来た蘭の9人だ。小五郎はまだ依頼人と話しているらしく、終わり次第来るといふ。

阿笠は、乾杯をしようとして、声をあげた。

阿笠「じゃあ、始めようかね。か・・・」

阿笠が『乾杯』と言おうとしたのを、少年探偵団の子供たち（元太・光彦・歩美）が横取りした。

元太・光彦・歩美『かんぱ〜い!!』

こうしてクリスマスパーティーが始まった。

まずは、バイキング形式の食事からだ。これらは、阿笠博士が注文していたものだった。

哀「博士、分ってるけど、あなたのために、肉形のメニューは極端に減らしたから。それでももしも食べたら・・・分ってるわね?」

阿笠博士は、少し顔を引きつらせ、がっかりした様子で言った。

阿笠「・・・もちろんそれは分っているよ、哀君。（アゝ今日こそ

肉が食べたかったのに・・・」

その頃、元太が歩美に怒られていた。

歩美「もー、元太君。そんなにしなくてもお肉は逃げていかないんだから・・・」

元太は、歩美に訳を言いながら食べていた。

元太「だってさ歩美・・・モグモグ・・・こうでもしないと・・・モグモグ・・・無くなっちゃうじゃねえか！？・・・モグモグ・・・」

こんな事もありながら食事は順調に進んでいった。小五郎も途中参加したものの、飲み仲間がいないため、阿笠博士と名古屋から途中参加した平次に、半ば強制的に酒類を飲ませた。そして、3人は酔いつぶれている・・・。

次に、少年探偵団だけでゲームをすることとなった。山手線ゲーム、王様ゲームなどなどをして、最後に、前から計画していたプレゼント交換をした。

阿笠「わしがクリスマスソングをかけてから、切るまでの間に、プレゼントを回しあいっこして、切ったときに持っていたものが、持っている人のプレゼントじゃ。いいかね？」

元太・光彦・歩美が元氣よく言った。

元太・光彦・歩美「はぁーい!!」

こうしてプレゼント交換を始める事にした。コナンはこのとき、このプレゼント交換によって、まさかあんな事が起こるなんて思ってもいなかっただろう・・・

そして阿笠博士がゲームをスタートさせた。

阿笠「スタートじゃ！」

阿笠は、あわてんぼうのサンタクロースと、Santa Claus is coming to town（サンタが街にやってくる）の2曲を流して、サンタが町にやってくるの途中で音楽を切った。

阿笠「ストップじゃ！」

そのときコナンは、灰原のものを、その灰原は、光彦のものを、その光彦は元太のものを、その元太は歩美のものを、その歩美は、コナンのプレゼントになった。ここで嬉しそうにする人や、悲しそう、つまらなさそうにする人もいた。

コナン「コレって・・・灰原から？ハハハ・・・どうせ、また変な薬じゃないのか？」

灰原「まあ、飲んでみなさい。」

コナン「まあ、飲んでみつか・・・」

こうしてコナンはその薬を服用する事にした。この薬が自分が欲しいものである事を知らずに・・・

しばらくすると、コナンの体は徐々に熱くなってきた。

『ドクン・・・ドクン・・・』

コナンはこの症状に何か懐かしいものを感じた。そう、忘れたくても忘れられないこの感触・・・APT X 4869の解毒剤の症状と酷似していた。

コナン「コレってもしかして・・・」

そのコナンは灰原を探していた。そして、灰原はすぐに見つかった。そしてコナンはこの薬の正体を灰原に聞いた。

コナン「おい灰原、この薬は何なんだよ？まさか、解毒剤なんてことは・・・」

灰原「・・・工藤君、と言う事はもう気づいてるじゃないの！？その薬の正体・・・」

そして、灰原は、この薬の正体をコナンに言った。

灰原「江戸川君・・・いや、工藤君。あなたが一番欲しいものの試作品。風邪を引かないようになってる分、元に戻る時間は限られてるわ・・・マウスの実験では、タイムリミットは8時間。今が6時だから・・・夜中の2時・・・まあ、それだけあれば十分でしょ？クリスマスプレゼントを渡すには・・・。」

コナン「・・・ああ、じゃあ、俺んちに行ってくる。あいつらには何か理由を言つといてくれ。蘭には俺が俺んちに呼びつけるから・・・」

灰原「・・・分ったわ。いつもの後始末ね。」

コナン「・・・悪かったな・・・」

こうして、コナンは発作が激しくなって他人に怪しまれないうちに、裏口から自宅に入って行った・・・

第3話 コナンのプレゼントの正体（後書き）

こんにちは、たくみ226です。

何とかクリスマスまでに蘭に会えるように、今日中に蘭に会えるあの程度に下地を完成させました。

パーティーの内容はかなりはしょっていますが、『内容を書いて欲しい』と言う要望があれば書きたいと思います。

第4話 コナンから新一へ・・・

コナンは何とか自身に発作が起こる中、工藤新一の自宅にたどり着くことができた。そして、大きくなった時用の服や下着類を探していた。そして、コナンは体が今までより熱くなるのを嬉しく思っていた。

コナン「やっと・・・蘭に・・・この姿で・・・会える・・・」

『ドクン・・・ドクン・・・』

コナン「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

コナンは時間が過ぎていくごとに、体の痛みがどんどん増していることを感じていた。そして、コナンにかかる負荷が最高潮に達し、コナンはとうとう・・・

『あゝあゝーーーーー!!・・・・・・・・』と叫んで、わずかな眠りについた・・・

そして、コナンが気を失ってから数分後・・・

それから目が覚めたコナンは、自分の体が今までの体の動き方と少し違っているような気がした。そして、目の前にある窓を鏡代わりにして自身の高校生の体であろう姿を見ようとした。窓から、暗いながらもクリスマススの電飾などで所々で明るくなっている景色があり、そこに室内の光が反射して、窓のなかに一人・・・子供の、小学1年生の姿・・・ではなく、完全に青年の姿をした人間が独り、ぼつんといった。

コナン『やったあーーーー！！元に戻った！！！！』

こうしてコナンは、元の姿である工藤新一になったことを確認した。そして、灰原の言った通りに、前の薬のような風邪の症状が起きずに済み、急いで『自分のやらねばならぬ事』をすることを思い浮かべた。そう、工藤新一の登場を心から待っていたあの女性に会うことを・・・

新一「こうしちゃいられねえ！！蘭だ・・・しかしプレゼントは何にしようか・・・今が8時10分だから、プレゼントを買って・・・10時だな。」

こういうと新一は、急いで『コナン』の服から携帯電話を取った。

『新一用』の携帯電話と同機種なので、携帯電話の中身を確認して『新一用』の携帯電話で蘭に電話を掛けた。

『プルルル・・・プルルル・・・』

新一の携帯から、それが5回鳴った後、その携帯電話の持ち主が出た。

蘭「もしもし、新一？」

蘭が、発信先が『工藤新一』であることが分かり、パーティー中でもあるのにも関わらず、大きな声を上げてそういった。この瞬間、阿笠邸では、『良かったな、蘭ちゃん。』という人や、『成功したのね・・・今回は良かったわ。』という人や、『工藤、言いたいことはちゃんと言つとけよ！』という人や、『新一、蘭君と最高のクリスマスを過ごすんじゃない。』という人や、そんなことより『アレ？この皿に肉残ってるじゃん、いったきまゝす・・・』という人などもいた。

そして、新一が応えた。

新一「蘭・・・オレだ。残っていた事件が区切りのいいところについたから、これから会いたいんだけどいいか？」

蘭は待っていたとばかりに新一に言った。そして、その言葉の中には、今までどうして会えなかったのかという怒りや疑問などがあった……

蘭「新一、今まで何してたの？どうして私の目の前にいなかったの？どうして……？」

この言葉には新一は返す言葉が無かった。なぜなら、新一は、いつも蘭の間の前に、『江戸川コナン』として存在していたのに、分かってはいけなかったが、蘭にはそのことが分かっていないからだ。

新一「……」

そして、蘭は、新一に言った。

蘭「新一、会えるの？ねえ、新一……！」

新一「ああ、会えるさ、じゃあ……10時に米花センタービルの展望レストラン。」

蘭はその場所が出てきた瞬間、新一との、嬉しいような、苦いような思い出を思い浮かべた。

蘭「またあそこ！？大丈夫なのね？こんどこそ事件があっても私のそばにいてくれる??」

新一はその蘭に期待に応えるように、「もちろんさ、今度こそ、今度こそ……」

そして、これ以上通話していると、新一としての蘭のプレゼントを
買うことができなくなると思っていたため、ここで電話を切った。
そして、こんな嬉しいアクシデントが会ったので、今度こそ、蘭に
言いたいことを言うために、それにふさわしいプレゼントを用意し
に行くことにした。

最終話 新一のクリスマスプレゼントと蘭のクリスマスプレゼント

米花センタービル 展望レストラン 10時

新一がそこに着いたとき、蘭は既にいた。そして、新一に向かってとつさに思いついたことを言った。

蘭「新一・・・やつと会えた。」

すると新一は、『この姿で蘭に最後に会ったのはいつごろだろう・・・』そう思いながら言った。

新一「蘭、久しぶりだな・・・」

新一は、言葉を選びながら言った。下手に言うと、蘭が怪しんで、コナンⅡ新一だとまた疑われたりしては少々面倒なことになるからだ。

そして、米花センタービルの展望レストランの中へと入っていった・・・

この、クリスマスイブのかき入れ時に、たまたまあの席だけが、キヤンセルが入ったために空いていた。

蘭「この席って・・・前に行ったときの席と同じ?」

新一「ああ、そうみたいだな・・・でも、良いんじゃないんのか? この席。」

そして、この席の前に二人で座ったとき、エレベーターで事件が起きて、その後、クレジットカードを残して、またどこかに消え去った出来事を覚えていた。

蘭「新一、もしも事件が起こっても、私のそばから離れないって約束してくれる？」

新一は、『今日だけは何が起きても蘭のそばにいる』という言葉を胸にして言った。

新一「ああ、今日しか会えないんだから・・・約束する。」

新一はそう言っていると、あれを用意しようと、自身のバッグの中に手を入れて探した。その時、蘭がいった。

蘭「それで・・・これ、クリスマスプレゼント。今日渡せてよかったわ・・・」

新一はそれを満面の笑みで受け取った。

新一「ありがとう、蘭・・・それで、オレからのプレゼントだ。」

そう言っていると、新一の手の中から、指輪が出てきた。その瞬間、蘭はこの光景に驚いた。そして、この光景を理解する間も無く新一が言った。

新一「蘭、オレが今追っている大きな事件を解決したら・・・蘭・・・オレと、結婚してくれ！いや、結婚してください！！」

蘭は、いきなり言われたプロポーズに、『キョトン』とした。しかし、蘭は、自分に言われたものだと思いき、自分の素直な気持ちを新一に言った。

蘭「新一・・・新一は、いつも、ホームズとかの推理小説や、事件のことばかり考えていたわよね。でも、私は・・・私は・・・そんな新一が大好き。」

そして、蘭のこの台詞を聞いたその周りにいた人は、いつせいに拍手した。

『パチパチパチパチ・・・』

最終話 新一のクリスマスプレゼントと蘭のクリスマスプレゼント（後書き）

ということで、この話を、25日のクリスマスということで終了する事にしました。

どうか、この作品に感想、暖かい評価、厳しい評価などをください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2848b/>

最高のクリスマスプレゼント

2011年1月26日12時00分発行